
スピリット

能力者

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピリット

能力者

【Nコード】

N5184A

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

『スピリット』の続編です。スピリットを呼んでからの方が楽しめます。

第1話（前書き）

スピリットの続編です。

第1話

朝6時俺はこの時間に起きて朝の鍛練にでなくちゃならない道場に入ると即座に背後から

「てやああああ」

跳び蹴りがとんでくるが俺は半身、体をずらし跳び蹴りをなんなくよける

「また避けられたあ」

と跳び蹴りをしてきた子供草野舞は悔しそうに『うう』と唸っていた。と思うと横から

「えいつ!」

と幼い子供の声が聞こえると同時に俺の足目掛けて蹴りをかましてくるが俺は子供の軸足を払い子供は

「うぎゅっ」

と変な声を上げて床に転がる子供草野リンは鼻を押さえて涙目で俺を見る

「あのなあ、舞、リン少しは違うて考えたらどうだ?」

俺がそう言つと舞が

「だって銀兄に正面から向かったって勝てっこないもん」
「だから他のやり方考えてみる」

俺が舞に言つと床に転んで鼻を押さえたままのリンが

「たとえばどんなの？」

「自分で考えろ」

「「いぢわる」」

俺は舞とリンの頬を膨らます仕草に思わず笑ってしまった。するとリンと舞を笑い始める……お互い笑い終えると

「由香はどこいった？」

と聞くと

「「あそこ」」

と声をそろえて上に指差す俺が上を向くと同時に正面から衝撃が訪れ俺は押し倒される

「勝ったああ」

と喜んで言つたのは草野由香。俺の上に乗る由香は

「銀次も少しは学習しなきゃね」

と笑いながら俺に言つと、舞とリンが俺の腕を取り腕枕にして

「「おやすみ」」

といって眠りに入る。が由香が二人の耳元で何か呟くと舞とリンは跳び起き道場からダッシュで出ていく。

「なんて言っただんだ由香？」

「んーただ朝ご飯抜きにするよって言っただけであんなったの」

由香の答えに苦笑いしていると由香が俺の体からおりたので俺が立ち上がると

「おはよう、銀次」

俺に笑顔で言ってくる由香に

「おはよう、由香」

と答え俺達は道場を後にする。

学校への準備も終えて朝ご飯に着く俺、由香、舞、リンは長方形のテーブルに着く。

俺の隣がリン。そして正面に由香が居てその隣に舞が座っている。いつも道理の日常を俺はふいに嬉しく思い、思わず笑顔になる。すると隣に座っているリンが

「どうしたのお兄ちゃん？」

「なんでもないよ、リン」

俺は笑顔のまま答えると正面に居た由香が小さく笑っていた。朝ご飯も食べ終わり学校へと向かう。

俺の名前は藤野銀次。

今いろいろあつて俺は草野家に由香、舞、リンと四人でくらしている。

「銀兄、今日、武道祭あるよね」

「ああ、小、中、高、大、の合同な」

「銀兄もでるよね？」

「どうだろな？」

「えっ銀兄でないの？」

「舞、安心しなさい、銀次にはサボらせないから」

舞が言う『武道祭』とは本来スピリットを使って戦うリーグ戦なのだがスピリットがなくなり中止になると思ったら武器しよう禁止の物となっただけで『武道祭』は行っらしい……

「……………由香」

「なに？」

「俺はやる気ないぞ」

「へえ、もし負けたらもう口聞かないから」

「……………マジ？」

俺が聞くと由香は笑顔で

「マジです」

……………こいつ変わったな……………

そんな事を思っていると学校に着いた。俺と由香は舞とリンを校門まで送り俺達のクラスに向かう。教室に入ると

「朝から仲いいねえ」

と男真田刃が話しかけてくる

「うるせえよ」

俺は刃の隣の自分の席に座り由香は俺の後ろの席に座る。

「由香、おはよう」

「おはよう、真奈」

由香に話しかけたのは由香の小学からの友達の新井真奈だ。

「おはよう、刃に銀」

「おう」

「うつす」

俺と刃が適当に真奈に挨拶すると

『ゴンッ』

「っつてえ」

俺は由香に頭を殴られ、刃は真奈に頭を殴られ

「朝はおはようでしょ」

見事、同時に俺と刃は殴られ同じ言葉を言われる。

真奈はそんな由香を見て

「由香変わったね」

「そうかな？」

「うん、今までだったら『ちゃんとおはようって言っただったし』
「んゝまあ誰かさんが勝手なことばかりやるからついついこうなっ

「ちやうんだあ」

由香と真奈の話しの理由を知る俺と刃は苦笑いすることしか出来なかった。

理由は俺と刃がかつてに『ウインドウ』に行った事がきっかけだった。帰ってきた俺は由香に散々泣かれ心配したと言われ勝手な事をしないと言ったが俺はその後の『ウインドウ』がやっていた人体実験に関わる奴を警察や刃の親父さん（スピリットでは言わなかったが刃の親父さんは闇の世界でもかなりの権力をもっている）に引き渡して一週間、何も言わずに家を空けてしまった。俺が家に帰ると舞とリンは俺に飛び付いて、大泣きした。その後の一週間は俺の両腕に舞とリンがくっついていた。学校も俺のクラスで腕を掴み離さない状態だった。

「銀兄と一緒にいる！」

「いる！」

と言って学校の先生に言って絶対に放さなかった。先生があきれて

「どうしてそんなに一緒にいたい为学校が終われば会えるでしょ」

と聞いてきたら舞とリンは

「また勝手にいなくなっちゃうから！！」

と言ってしまい俺は先生に睨まれたが本当の理由など言える訳がなただ苦笑いをするしかなかった。そして由香は俺が帰ると泣きながら俺をたたき

「嘘つき！！勝手にどこも行かないって言ったでしょ！！心配した

んだから!!」

と言って以前とは違い俺にかなり厳しくなった。そして俺のいない間の由香の様子を訪ねると

「口どめされてるから言えない」

と言っていた。俺はそんな事を考えていると

「銀次!!」

「っ!!!!」

大声で俺の名前呼ばれて俺は我に帰った

「由香なんだよ大声だして」

「なんだよじゃないよ、もう。それでどうするの」
「なにが？」

「……聞いてなかったの」

俺は由香に睨まれ

「……ごめんなさい」

俺と由香のやり取りを見ていた刃と真奈は

「情けないぞ、相棒」

「じゃあ刃だったら、あれやられたらどうする？」

「謝る」

「でしょね」

俺と由香に気付かれないように小声で喋っていた。

由香は俺が謝ると『もう』と小声で呟き

「だから今日の武道祭も手を抜くの？」

俺はその言葉を聞いて慌てて

「バ、バカ俺はいつでも本気だぞ」

俺の言葉に不満の言葉を言おうとしたが俺が由香の耳元で

「ここ教室だぞ、俺が手を抜いてるって知ってんの由香と刃と真奈ぐらいなんだから」

俺がそう言つと由香は『ハッ』とし『ごめん』と小声で言った。

「でもさ、今日の武道祭合同なんだよ」

「それがなんかまずいのか？」

「舞とリンにばれるじゃん」

「あっ……………」

俺は由香に言われた事に固まった。俺と由香は話しあうが

……………結論……………

「なるようになるだろ」

と適当な事を考えた。由香は俺の結論に『ハァ〜』と溜め息をはくが

「銀刃らしいね」

と笑ってくれた。そんなこんなで先生が来て発した言葉が

「逃げる!!」

俺は

「何言つてんだ荒川、頭でも……………!!」

「おい銀刃、ふざけてる場合じゃなさそうだな…………」

「見たいだな」

俺と刃との会話に俺の後ろの席の由香と刃の後ろの席の真奈がよくわからないって感じで俺達を見るが俺と刃は既に俺達の『敵』に目を向けていた。

第1話（後書き）

長いかも知れませんがお願いします。

第2話

俺と刃がみていた『敵』は荒井の背後から俺達を見ていた。

「刃、あれなんだと思う」

「……………よくてただの人、悪くて人体実験で調整された奴だな」

「前者だとももの凄いうれしいんだけど……………」

俺と刃が『敵』を見て眩いた。後ろにいる由香と真奈は『敵』を見て恐怖に染まった顔で俺と刃の後ろに隠れた。すると一人の生徒が「先生、後ろになんかいるよ」

「えっ……………」

後ろに振り向いた荒川は恐怖に染まった。

「やめっ『ズシュ』」

荒川は『敵』の手によって肩をえぐられた。

「ぐわああああ」

荒川の悲鳴が合図のように生徒達に恐怖がおしかかる

「逃げろおおおお」

誰かが言った一言で教室にいた生徒は全員逃げ回り叫んだ、そんな光景をよそに俺と刃は

「刃、よくてなんだっけ」

「人、悪くて人体実験で調整されたやつ」

「どっちだと思う？」

「多分銀次と同じ考え…」

「じゃあ……………」

「後者だな！！」

俺は鞆を『敵』に投げ付け気を引き、刃が荒川を助ける。それらを行うにかかったのは一瞬。俺が投げた鞆が『敵』に当たると既に刃は荒川を抱えて、由香達の前にいた。

「どうする！？銀次！！」

「潰す！！」

俺は答えると既に『敵』の腹部と頭に拳を突き出し、吹き飛ばす。

「銀次、今は逃げるぞ！」

「なんで！？」

「自分の目で確かめろ！」

俺が振り向くと由香と真奈は既に顔を真っ青にしていた。俺が由香を抱えて、刃が真奈を抱えて教室をでる。荒川は既に教室にいなかった。俺と刃は教室を出て外に出た。

「なんかの冗談かよ……………」

「それなら俺すげえうれしいわ、相棒」

「…………行くか、刃」

「…………武器なしでか」

「怖いかな？」

「こわがつてんの銀次だろ？」

「冗談！！」

外にでると蟻や蜘蛛がいた。大きさが軽く2mを越えているが……………

「いつからこの国はこんなもん飼うようになったんだ？」

「少なくとも俺はこのガルゼ（銀次達がいる国がガルゼ、そして他にもいくつも国がある）の国で飼ってる奴はみたことねえな。刃はみたことあるか？」

「こんなでかくないけどな」

「だろうな」

俺と刃が話していると蟻が一匹こちらに近付いてくる。その様子を見て由香と真奈は俺と刃の背中にしがみつく、俺と刃は体制が崩れ立て直すころには既に俺と刃の目の前にいた。

「「やばっ!!」」

俺が右に跳び、刃が左に跳ぶと

「刃、銀次!!」

俺と刃が呼ばれた方向にむくと中年の見慣れた男が立っていた

「親父!？」

「真田さん!？」

そこには車に乗った刃の親父真田一さなだはじめがいて俺と刃に向かってなにかに投げてくる器用に俺と刃の手元に来た包みを空けると俺の包みには50cmくらいの十字型の刃がついていて柄は2mぐらいの槍が二本でてきた、刃の包みには2m近くの長刀がでてきた。

「なにこれ!？」

「話は後だ!!好きなように使え!!」

「使えって言っただけ……」

「ごちゃごちゃ言わねえでさっさとやれ!!」

「ああ、もう!! わかったよくそ親父!!」

俺が二本の十文字槍をてにもち刃が長刀を両手でもち蟻へと近付く（俺が由香を背負い、刃が真奈を背負ったまま）刃が上から長刀を蟻へと振り落とし俺が蟻に向かい右手の槍を突く。蟻は刃の長刀が触れた場所はなんの抵抗もなく落ちる。俺の槍は蟻に当たると火が着き蟻を瞬時に塵にする。俺がその光景に絶句していると

「銀次い、終わったあ?」

と後ろから由香の涙声が聞こえ背中に抱き着いている由香を一度体から離し由香の顔を見て怪我がない事を確認すると

「銀兄いゝ!!」

「お兄ちゃん!」

と真田さんの車から舞とリンがでてきた。

「なんで車に乗ってたんだ?」

「真田のおじさんにお兄ちゃんのとこ行くからのれって言われたの」「そうか……」

俺は刃の方に向くと真田さんと刃が話しあっていた。

「真田さん、この槍はなんなんですか?」

「スピリットだ」

俺はその言葉を聞くと少し驚いたが真田さんの次の言葉をまった。

第2話（後書き）

今回は特にこれからどうゆう風にしようなどないのでいつ終わるか
わかりません！！

第3話

俺と刃は黙って真田さんの話を聞いていた

「まあ、正確に言うത്スピリットとはちょっと違うんだけどな」

「どういう事だよ？親父」

「ようするにお前ら今もってんのはスピリットに似てるけどなんか違うんだよ。そのなんかは俺にはわかんないけどな」

「真田さんこれ、どこにあったんですか？」

「上から落ちて来た。」

「はい？」

俺と刃は声をあわせて聞き直した。

「だから上から落ちてきたんだよ」

俺と刃はただ『大丈夫かこの人』てな目で見てると俺の持っている槍をじつと見ている舞とリンが

「「なんかかいてあるよ」「」

そこには

「『紅蓮』（ぐれん）？なんだそりゃ、刃のにはなんか書いてないか？」

「んゝ、あった。『麒麟』（きりん）だつて」

「なんだと思う？」

「さあ、てかなんでそんな周りの人達はキョトンとしてんの？」

刃が聞くと由香が俺と刃に

「読めるの？」

「読めるけど、てか由香は読めないの？」

「……………うん」

俺と刃が顔を見合わせて

「「えっ……………」」

「だってそんなの見た事ないもん」

真奈が俺と刃に言うのと由香達は頷いていた。その時校舎から何かが飛びだして来た。それは人影でこちらに気付くと

「助けてくれ！！、変な奴に終われてるんだ！！」

俺と刃は人影がでてきた、校舎を見て

「刃何だと思う？」

「かわいい動物」

「あれ飼って躡るのか？」

「……………その前に殺されそうだな」

俺と刃の視線の先には『ワニ』がいた。二本足で立っていて体制は前につんのめっていて腕が長く筋肉質で手は三本指で鋭そうな爪がついていて顔はワニ。

ワニは俺達を見てゆっくりこちらに近付いてくる。

「刃……………」

「銀次……………」

俺と刃は顔を見合って

「最初はグーじゃんけんぽ!!」

「……………」

「勝ったあ!!」

「銀次に、負けた……」

俺は落ち込んでいる刃の肩を叩き

「落ち込むな、相棒」

「うるせー」

「俺が変わってやつてもいいんだが」

「なら変われ!!」

「やだ、負けたの刃じゃん」

俺と刃のやり取りを見ていた由香が

「銀次!! さつさと行く!!」

「俺!? なんで!?」

「早く行く!!」

俺が由香に言われ渋々ワニへと向かうと

「がんばれよ相棒!!」

と刃が俺に向かって手を振ると『ゴンッ』

「つてえ」

「刃も行く!!」

刃が真奈に殴られ渋々俺の隣に立つ。

そんなやり取りをしている内にワニ（2 mくらいあるが）は俺達との距離を3 mぐらいになっていて刃がワニに突っ込み両腕を切り落とし俺が槍でワニの腹を横殴りに振る。ワニは一瞬で塵になり俺は右手の槍を肩に乗せ、刃は刀を逆手に持ち

「俺は今の校舎行くわ」

「んじゃ俺はちびっ子を助けに行くわ」

俺と刃が話していると校舎から出てきた人影の男が

「おい、待てまず俺を安全な所に連れていけ！」

と叫ぶが俺と刃は無視していると男がリンの腕を引っ張った。

「ひゃっ!!」

「こんなガキ達を助ける暇があればまず俺を助ける」
それを見て刃と由香、真奈が慌てて

「バカ、黙ってる!!」

「ちよ、リンの手を早く離してっば」

「泣かない内に早く!!」

と必死に何かに怯えたような声で男に話しかけるが

「黙れ!! 早く俺を安全な所まで連れて行け!!」

と男は自分に怯えていると勘違いをし、さらに強気になり怒鳴る。
するとリンが

「由香お姉ちゃん」

と涙声で訴えてきたのを見た刃と由香、真奈は更に怯えた

「ちょっと……あんたマジに離しなって……心配してんじゃないけど素直に離れた方が自分の為だって……」

そう言った真奈は既に体を何かに怯えるように震わせていた。それを見た男が

「黙れって言ってるんだ!!」

といってリンを近寄らせ男が懐からだしたナイフをリンの首筋に当てて

「早く俺を安全なところまで連れていかないとこのガキを殺すぞ!!」

男がそれを言った瞬間由香、真奈、舞は刃の体の後ろに隠れた。そして首元のナイフと男の『殺すぞ』の一言で

「お兄ちゃん」

とリンは泣いた。

「うるさい!!本当に殺すぞこのくそガ……」

「黙れ」

今まで黙っていた銀次の一言にその場にいた由香、舞、真奈が『ビクッ』とした刃は黙って銀次の目をみたらすぐにそらし目をつぶった。

「なっ!!このガキがどうなってもいいのか!?!」

「お兄ちゃん」

俺は黙って男に近づき

「最後だ……リンを離せ」

「黙れ！！近づくな！！本当に殺『ザシユ』」

「黙れ」

「うぎゃああああ！！」

俺は一瞬でリンに近づき男の腕に槍を突き刺しリンを男から離し

「てめえに用なんかねえんだよ」

俺がそう言つて槍を構えるとリンが足にしがみついて

「お兄ちゃん」

と言つて泣いていた。俺はリンのその姿を見てしゃがんでリカと目を合わせて

「もう大丈夫だ、リン」

「お兄ちゃん」

俺が笑顔で言つとリンが俺に抱き着いて服に顔を押し付けて泣いた。俺は黙ってリンの頭をなでていると刃が

「おい、一段落した所悪いんだけど」

「なんだよ刃」

「あれ」

刃の指の向こうには由香、真奈、舞が怯えた表情で俺を見ていた

「刃あれなに？」

「リンちゃんが人質に取られた時自分がどんな表情してたか思い出してみろ」

「どんなって、………あ」

「思い出したか？」

俺は一度由香達に視線を向けて『ハアッ』と溜め息をはくと俺はリンを刃に任せて由香達に近づく。由香と真奈、舞は俺が体を『ビクッ』とさせたが俺はそんなのお構いなくで、由香の前まで行き

「由香大丈夫だから、俺はもう昔に戻ったりしないから」

俺は優しくそう言つて由香を抱きしめた。そして抱きしめたままの状態で真奈と舞に

「ごめんな、怖い思いさせて舞、真奈。」

俺は舞の頭を撫でて、由香と舞に

「もう『戦神』になんてならないから大丈夫だ」

俺がそう言つと泣いたままのリンが来て舞と一緒に足にしがみつき泣いて、由香も泣いていた。そして由香と舞、リンが泣いている間に蟻や蜘蛛に囲まれそれを刃が切り倒していったのを知らない由香と舞、リンは落ち着くと周りの光景に驚いていた。周りには刃が切り倒した蟻や蜘蛛の死体が百はかるくあつたからだ。その後で俺と由香、舞、リンでワニが出てきた校舎に向かい、刃が舞とリンが通う少等部の校舎に真奈と二人で向かった。

第3話（後書き）

校舎に入ってから銀次達の話が続きです

第4話

俺と由香、舞、リンはワニがでてきた校舎、高等部の校舎に入っていく。

俺は高等部に入る前に由香が俺の顔を見ていた。

「どうした由香？」

「ん、ちよつとあの事思いだしちゃって」

「あの事？」

「ほら、一年生の時銀次が学校で怒った事だよ」

「……あゝ、あれか……」

「銀次……覚えてないでしょ」

由香が俺を怪しいという感じで俺を見ていたので

「悪い、覚えてない」

と言うと由香は

「もう、ほら銀次が高等部になったばかりの時三年生の人が私の事殴ったでしょ、その時銀次が怒ったんだよ」

「……まだ覚えてたのか」

「一つの思い出だし、あの時銀次の『信じる』がどれだけ重い言葉なのかも話してくれたから」

俺は苦笑いで由香の顔を見る。

二年前

「銀次い」

俺を呼ぶ声がして後ろに振り向くと由香が小走りで俺の所に来る。

「クラスもう見た？」

「いや、これからだけど……」

「一緒のクラスだよ！！真田君も真奈も！！」

「へへ、よく同じクラスになれたな」

「うん、よかったねえ」

俺と由香が話しながら歩いていると『ドンッ』と前を歩いていた三年生に肩がぶつかった。

「あ、すいません」

俺が謝ると三年生の男は

「一年が調子のんなよ」

と訳がわからないまま殴られそうになる。が俺が男の足をかるく引っ掻け相手のバランスを崩そうとすると男は豪快に床に顔面着地した。由香はその様子を見てあたふたとしていた

「正当防衛だから」

俺が鼻を押さえる男に言い放ち教室に向かう。

「よう刃」

「よう相棒！！」

教室に入り1番最初に刃に声をかけ、珍しく真奈としないことに気付いて

「真奈は？」

と聞くと刃が廊下で喚いている真奈とそれをなだめようとする由香がいた

「どうしたの、あれ？」

「俺がさっき変な奴に絡まれてさ、それで俺が手を出さないでいる事に怒ってる」

「なんで手を出さないのに怒ってたんだ？」

「なんか俺は手を出さないダメらしいよ」

刃苦笑いしながら答えた。それから二日後、俺と刃は三年の男に由香と真奈をもらうと言われて旧体育館にくるよう言われた。俺と刃が行くと舞とリンの泣き声が聞こえて泣き声が聞こえた旧体育館の裏に行くと三年の男に囲まれ、殴られ、腹をけられたりしていた舞とリンがいた。舞とリンが俺を見つけると

「お兄ちゃん」

と恐怖にみちた顔で俺に言った。その時に俺の中の何かが壊れた。

「てめえにはようはねえんだよ一年坊が！！さっさとうせ『ザンッ』」

「黙れ」

俺は右腕を肩から切り飛ばす。肩がなくなった男の叫びは周りにいた奴らに恐怖をうつけ走って逃げようとするが、俺は男達を殺し

はしないが『神楽』から出した斬戟で男達の四肢のどこかを切り飛ばした。男達が悲鳴を上げられず気絶した時、俺に舞、リンが抱き着いて

「由香お姉ちゃんと真奈お姉ちゃんがあゝ」

「変な奴らに連れてかれたゝ」

舞、リンの言葉を聞いて俺と刃は旧体育館に向かった。俺と刃が入ると男達がスピリットで武装して由香と真奈を殴り蹴り飛ばしていた。そして由香が俺に気付くと

「銀……次……助け……て」

「由香………」

俺が由香の名前を呼んだ時、

「銀次……！」

刃が既に真奈を見つけ俺の所にきていた。真奈は服は乱れていたが殴られたりされただけで刃の腕の中で安心した顔でこちらを見ていた。その様子をみた男が

「近づくんじゃないぞ……！こいつを傷つけないなら黙って見てろ」

俺が黙って男を睨んでいると後ろから

「銀兄い」

「お兄ちゃんゝ」

俺の後ろには男に捕まって動けない舞とリンがいた。そして

「銀次……痛いよ……助けて……」

と床にふせている由香が呟くように俺に助けを求めた。刃がその様子を見て齒ぎしりしていると

「おら一年!!お前は黙って俺らにやらればいいんだよ!!」

男がスピリットを出した。『ズンツ』とその場の空気が重くなり冷たくなった。

「由香と舞、リンを話せ」

俺が発した言葉はいつもの由香達に向けられる温かい物ではなく、低く、威圧感のある声でその場の全員が恐怖を覚えた。舞とリンは泣き止み、由香、真奈は体を震わせ男達は固まった。その場で唯一体が自由に動く刃が

「早く由香と舞、リンを離せ!!死にたいか!？」

刃が叫んでも男達はその場を動かない。いや動けない。銀次が発した言葉の威圧感で既に呼吸困難に陥り既に目は虚ろだった。刃が銀次に近づこうとした時既に由香、舞、リンを捕まえていた男達は右腕が無くなっていた。その後は暴れ狂う銀次と刃の戦いで誰の目にも見えない戦闘繰り返し、由香の

「銀次、どこ？」

の一言で銀次と刃の動きが止まり俺は舞、リンを抱えて由香の前に行き、刃は真奈の前に行って刃はいつもの口調で銀次はさっきの威圧感のある声は全くなく優しい声で

「もう大丈夫だ」

と二人で言うと四人は泣きだして泣き終わったと思ったら寝てしまい、俺と刃は四人を抱えて草野家に向かった。家に着くと居間に四人を寝かせ刃と二人で寝顔を見ていた。気付くと俺は寝ていて俺が起きた時、由香達、四人も起きてしばらく沈黙していたが真奈の質問から話しが始まった

「ところで、刃と銀はなんで学校の武道祭では私より弱かったのにそんなに強いのか？」

俺と刃が苦笑いをしていると由香が

「この二人はいつも『めんどい』とか言って半分どころか一割も学校じゃ本気にならないんだもん」

真奈は啞然とした顔で俺と刃を見ていたが

「まあ、現実にあんなもんみちゃったらなんも言えないわね」

何かに呆れたような口調で言った。俺は刃に『あと頼む』と言って俺はその場を後にした。それを由香、舞、リン、真奈、刃が見て銀次の姿が見えなくなると刃に由香や真奈は次々質問した

「ねえ、刃。あの時の銀次なんだっただの？」

「俺もわかんないけどあんなに怒った銀次は初めてだ」

「だから刃、なんであそこまで怒ったのか聞いているの！」

「あんま言いたくないんだけど前に一回銀次に由香がさらわれたりしたらどうするって聞いたんだ。そしたら銀次は

『助けるさ、俺の全てを賭けて。由香だけじゃない舞やリンだって

さらわれたら俺が全力で助け出す。例え『戦神』になつて舞やリンに嫌われても、由香に恐れられても俺は助ける。

俺は由香に『信じる』って言われた。

俺は誰も信じない。

仲間を気取つても命が危なくなると誰かを犠牲にしてまで生きている奴ばっかだと思つてた。いくら仲間だと言つても所詮他人だから。そんな物だと思つていた。でも由香は俺に『信じる』と本心で言つてくれた。だから俺は由香は信じたいと思う。そして俺が『信じる』つて言つた奴は俺はどんな事があるうとそいつを信じる。』つて言つたんだ。銀次は「

「真田くん……………」

「なんだ草野？」

「銀次は自分が信じるつて言つた奴はなにがあるうと信じるつて言つたんだよね……………銀次がそう……………言つたんだよね？……………真田君……………」

「……………銀次が……………そう……………いつたんだよね」

「ああ、銀次がそう言つた」

刃が言つと由香は地面に座りこみ泣いた。それを見た真奈は大分驚いていたが、刃はただ優しく笑つたままだつた。銀次は由香や刃に会う前どんな奴も信じない。そう誓つていたのを知っている由香は銀次が『信じる』といった事にとても喜んでいた。そしてその事から三日後、由香は銀次に『信じる』と言われ由香は笑顔で銀次に抱き着いていた。

校舎前

由香が物思いにふけていると前にいる銀次が

「由香大丈夫か？」

「うん。」

それだけが銀次と由香はお互いに何を思つかは手に取るようになかった。

『この人だけは信じる』

由香と銀次は静かに手を握った。まるで『信じる』という証拠のようにな……

最終話

俺と由香、舞、リンが校舎に入る。

「静かだね、銀次」

「だな……とりあえず誰かいるか探すか」

俺と由香が話していると舞が前を見て

「銀兄、今なんか動いたよ」

「どこで？」

「ほらあの教室の辺り」

俺は舞が指さした所を見るが特に変わった所はなく

「なんもないぞ、舞」

舞は無言で首を傾げていたがしばらくして『ガタン』と舞が指さしていた教室から何かが動く音が聞こえた

「なんだろ……」

「行ってみたらわかるだろ」

俺が先頭を歩き後ろに由香、舞、リンの状態で教室に入る。その教室は『3 A』と書いており俺と由香、刃、真奈のクラスである。

俺達が教室に入ると掃除ロッカーがカタカタと揺れていた。俺は背中あいかわなきさに担いでいた『紅蓮』を片方だけ左手に持ってロッカーの前まで行く。俺はロッカーを勢いよく開き中に『紅蓮』を着こうとして止めた。ロッカーの中には同じクラスの相川渚がロッカーでうずくまっていた。由香が俺の後ろから前にでて

「大丈夫、渚ちゃん？」

「えっ……由香ちゃん……」

相川は由香の顔を見て驚いていたがすぐに泣き顔になってその場に座りこむ。

俺は先に行こうとするが由香が

「銀次、止まって」

の一言でその場に留まり教室で渚が落ち着くまで待った。落ち着くと渚は俺の背中に担いでいる『紅蓮』に目を向けていた。俺がその視線に気付き

「これは気にするな」

俺はそれだけ言って黙った。由香は俺が言った事を聞いてから渚に

「他に誰がいるかわからない？」

「わからない。気付いたら誰もいなくて怖くなってロッカーに入っただけだから」

「仕方ねえか……とりあえず他に誰かいないか校内探すか」

「全部探すの？」

「まあな」

「……夜までに帰れるかな……」

由香が変な所を心配しているのはこの高等部だけの校舎で全部見てまわるのに半日はかかるからだ。

「とりあえず探すか」

「探すって……銀次何処を？」

「下から準に探すしかないだろ」

舞とリンはなにがあつたかわからないと言つた感じでワクワクしていた。俺達は一階の所から回ることにして今体育館のドアの前にいた。

「銀次……中になんかいるよね……」

「みたいだな」

体育館の中では『ヒタヒタ』と音が聞こえる

「なにが居ようと行くけどな」

勢いよく扉を開けると中にはワニだけじゃなくて蟻や蜘蛛も何匹かいた。俺は勢いよくドアを開けたがまた勢いよく閉める。

「……」

しばらく俺達四人は沈黙。だが沈黙は体育館の中から聞こえる絶叫ですぐに破られた。俺がドアを開けると蟻、蜘蛛、ワニは何かを襲うように一点を集中して襲う。その一点には五人の生徒がいたが男女どちらか解らなかった。俺はすぐに生徒五人の前に立つ。五人は俺を見て驚いていたらしいが俺は無視して前にいるワニ、蟻、蜘蛛と対峙する。先頭にいたワニがゆっくりとしたスピードでこちらに向かってくる。『チリン』

鈴の音がすると思うとワニ、蟻、蜘蛛は既にばらばらになっていた。その場にいた由香はただ呆然と見ていた。

「銀次……」

「大丈夫だ。それに早く助けるぞ」

「うん」

俺と由香は五人を連れて一度校舎からでると外には刃と真奈が真田さんとなにやら揉めていた。

「何やってんだ？刃」

俺が言うと刃達は俺の方を向いた。

「銀次！お前は草野とこれから一緒にいるんだよな！！」

「いるんだよね、銀！！」

刃と真奈は俺に物凄い勢いで聞いてきていた。

「そりゃあな」

「だろ！！だから親父その話は無しだ！！」

「刃なんだ話って？」

「それは……」

刃が黙っていると真田さんが

「銀次、お前にはこれからもう一つの世界に向かって貰う。」

「もう一つの世界？」

「そうだ」

俺がなんだそれと思っていると真田さんが

「もう一つの世界ってのはそのまんまの意味でこれからすぐに向かつてもらう」

「なんか強制だな……」

「のんびりもしてられなくてな」

「なんで？」

「あのワニとかは別の世界から来ていたみたいでな、その世界で根源をねこそぎ断ってもらいたい」

「期間は？」

「わからん。だが一度もう一つの世界に行ったら戻ってこれるかわからん」

俺は真田さんの話を聞いてると刃や真奈、舞、リンが

「んなどこ行く必要ねえだろ相棒！！」

「あんたが行かなくなつて他の誰かが行けばいいじゃない！！銀！！由香の側にいるんでしょ！！」

「銀兄もうどつか行くのやだ！！行くなら舞も行くもん！！」

「お兄ちゃん行くならリンも行く！！」

四人は色々怒鳴っていたが俺は黙って由香の方を見ていた。由香も黙って俺の方を見ていてしばらくすると

「行つてらっしゃい。銀次」

「「「「！！由香！！」」」」

「だって銀次こうなつた時止めても意味ないんだもん」

由香は笑顔だったが目からは涙が流れていた。

「由香……………」

「銀次、でも出来れば早く戻って来てね……………あんまり遅いと浮気しちゃうからね」

「由香……………」

俺は由香を黙って見ていたが俺は真田さんに目を向けて

「行きます。もう一つの世界に」

「銀次!？」

「悪いな、刃。でも由香に『行つてらっしゃい』って言われたからさ。俺は行くよ」

「なら俺も行くぞ!!俺達は親友だろ銀次!!」

「それは駄目だ。」

「どうしてだ!？」

「由香を守る奴がいなくなる、俺がいない間由香を頼むぜ相棒」

「……………銀次がいない間に俺が由香を守らなかつたらどうすんだ!」

「それはねえよ」

「なんで言い切れる……………」

「刃、お前は俺の『信頼』できる唯一の相棒だから。俺はお前が由香を守ってくれると信じてるから。」

「……………わかつたよ……………でも!!」

「なんだ?」

「もし死んで帰ってきたり帰ってこなかったりしたらボコボコにしてやるからな!!」

「ほどほどにしてくれよ、相棒」

「うるせえ、勝手に一人できめやがって」

「んじゃな、刃」

「おう」

『パチン』

俺と刃ハイタッチすると

「銀次、そろそろ行くぞ」

「わかりました。でも真田さん、どうやって行くんですか?」

「あれだよ」

真田さんが指差した先には何かの黒い穴が会った。

「あれで行ける」

「わかりました。……………じゃあな、皆。」

俺はそういつて穴をくぐろうとしたが

「銀次！！」

由香の声で止まる。

「帰ってくるよね！？ずっと待ってるから！！待ってるから、ちゃんと帰ってきてね！！銀次！！ちゃんと帰って来て私を守ってね！！」

俺は由香の方へ振り返らずただ片手を上げて

「由香！！俺は由香が大好きだ！！だから帰ってきたら結婚してくれ！！返事は帰って来てから聞くよ！！」

由香は俺に負けない大声で

「銀次の馬鹿！！あたしはあんたなんか大っ嫌い！！大っ嫌いなんだから！！」

俺はそれだけ聞くと黒い穴に入った。

「銀次のバカ……………大好きだよ……………」

由香は地面に座り泣いた。『銀次が帰ってきたら絶対に泣かないで迎えよう』と思っていたからだ。そして明日は笑っていようと思った。

「だって、わたしが笑ったら力になるんだよね？
銀次………待ってるからね大好きだよ。銀次」

三年後

由香と舞、リン、真奈は今真田家にいた。

「誕生日おめでとう！！」

由香！！」

「おめでとう、由香お姉ちゃん」

「おめでとう由香姉」

「ありがとう、真奈、舞、リン」

そう今日は由香の誕生日で同時に銀次の誕生日でもある。今この場には由香、舞、リン、真奈、刃がいて真田家の主、真田一がいなかったが

「ごめんちよつと急用出来たから遅れるよ、それまでは好きにやっ
ていていいから、なるべく早く戻ってくるから」

とそれだけ言つて、真田一はどこかに出掛けてしまった

「まったく、親父もプレゼント忘れんなよな。」

「真田さんってプレゼント取りに行ったの？」

「多分な」

「よかったね、由香姉」

そんな話をしていたら

「銀次がもう一つの世界に行ってからもう三年なんだね」

由香が唐突に話を切り出した。だが暗い言葉じゃなく明るく早く帰って来ないかな。と恋人を待つ心境で話していた。

「そうだね、お兄ちゃんが出ていってからもう三年なんだねえ」

「全く、銀の字は一体いつ帰ってくるんだろうね、ねえ由香」

「そうだね……でもなんでかな」

「なにが？」

「んゝなんか今日は朝からそわそわするんだよね……」

「そわそわって？」

「よくわかんないけど……」

「ふゝん」

真奈は由香とそんな話をしていると由香が突然

『ハッ』として玄関の方を見た

「どうしたの？由香？」

「……………来る」

「はい？」

真奈がどうしたんだと思っていると舞とリンも由香と同じような顔をして玄関を見ていた。すると玄関が開き真田一が入ってくる。

「お、帰ってきたな。」

刃がそういつて玄関にいる真田一に

「おかえり、おや……………!!」

刃は最後まで言葉を発せないで由香、舞、リンと同じように固まった。真奈がなんなのよと思ひ玄関に目を向けるとそこには……真田一、この家の主が立っていて特になにもないと思うと由香が

「ぎ……ん……じ？」

その真田一のうしろには銀字の十文字槍『紅蓮』が会った。

「親父、それ……」

「さつき学校の前に行ったら校庭に刺さっててな」

「……銀次は？」

「いや、その場には居なかったようだ」

「っ……！……私も行く……」

由香が言った言葉に全員が驚いた

「由香、なにいつてんの！？」

「そうだ草野！？何考えてんだ！！それに行くって行ってももう穴はないんだぞ！！」

「行くの！！銀次になにかあったのかも知れない！！」

そう言つて走りだそうとする由香の手を美奈が掴み引き止める

「ちょっと！落ち着きな由香！！」

「そんな暇ない！こうしてる間にも銀次が危ない目にあつてるかも知れないんだよ！！」

「由香、落ち着きなつて、あんたが慌ててどうすんの！？」

「いや！！離して！！銀次に会いに行くの！！離して真奈！！離して！！お願い銀次の所に行かせて、お願いだから！！なにかあった

かも知れないじゃない!」

「心配してんのは由香だけじゃないんだよ!」

「離して銀次に会いに行くの、お願いはな」

「うるせえぞ由香、俺ならここにいるよ」

「「「「えっ」「」「」」

由香達の視線の先にはボロボロの黒いコートを着ている男が立っていた。

「銀……次?」

「ただいま、由香」

由香は驚いた表情から一変急に怒った顔になって

「バカ! ! 心配したんだから! !」

そう言って銀次に近づいて抱きしめた。

「バカあゝ」

「泣くなよ由香。ちゃんと帰ってきただろ?」

「うるさいバカあゝ」

銀次が由香に困っていると舞とリンが俺の背中に飛び付いて

「お兄ちゃん! !」

「銀兄! !」

としがみついて泣いた。

真奈は

「おかえり、銀」

と一言、言って黙って銀次を見ていた。

刃は

「よう相棒」

「よう刃。」

銀次と刃はこれだけ言って黙った。そして、真田家で俺と由香の誕生日が始まった。

誕生日が終わると舞とリンは寝てしまい、仕方なく真田家に今日は皆泊まる事になった。銀次と由香は真田家の庭で二人揃って空を見ていた。

「由香、俺の最後に言った事覚えてるか？」

「うん」

「じゃ、質問。俺と結婚してくれますか？」

「うん」

銀次は由香を抱きしめ静かにキスをした。

五年後

「んじゃ行くか、由香」

「うん」

俺と由香は結婚して、今日は真田と真奈の結婚式だ。正直この事はびっくりしている。でもこれからはもっと色々な事があると思う。それでも俺は由香と一緒に乗り越えられると思う。大事な人がい

END

るから.....

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5184a/>

スピリット 能力者

2010年10月17日02時33分発行